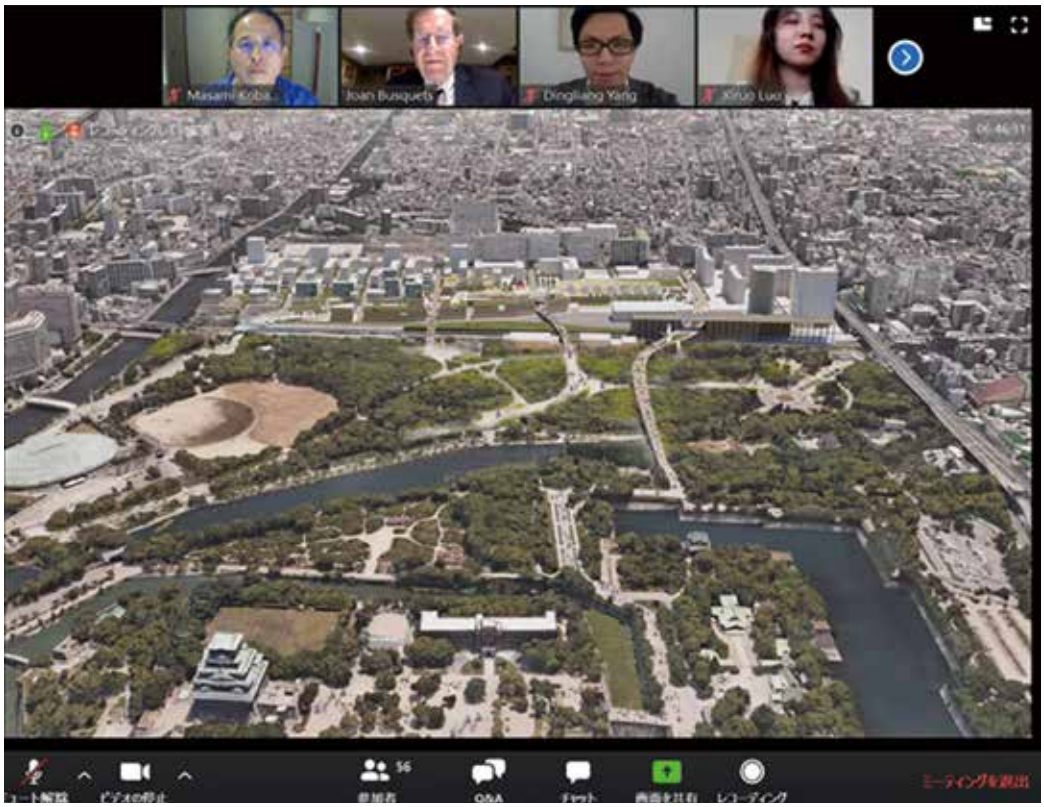
TDA News Letter　Vol.50

景/観/文/化

NPO法人 景観デザイン支援機構　けいかん・きこう　http://www.tda-j.or.jp

2020-09-01

特集　コロナ禍の中で考えるこれからの景観



アフターコロナ時代の生活像と景観デザインについて

今回のコロナ禍の中で、あらゆる人たちが、心理的にも肉体的にも大変な苦痛を強いられた。ここでは､「接地性」と「離地性」について述べてみたい。アフターコロナ時代の生活像について様々な論議が展開されているが、新型ウィルスにより徹底的に「接地性」が軽んじられたために、対面コミュニケーションが重要な教育や業務の現場はテレワークを強いられ、街中で行われていた通常の人的交流が疎まれ、交通機関は衰退し、全国の観光業は廃れてしまった。逆に「離地性」を高めるコミュニケーション産業が飛躍的に伸び、宅配飲食が人気を呼び、今まで高額なコストを強いられた国際会議がいとも簡単に同時開催できるようになってしまった。「袖すり合うも多生の縁」という言葉が死語になってしまったような今の状況は、人が集まる楽しい空間や地域コミュニティーによる質の高い「接地的空間」を求める私たちの仕事にとっては、危機的かつ挑戦的な状況に陥ったと言わざるを得ない。

5月以来、大学ではすべての授業（デザインスタジオやグループ演習など）がオンライン授業になり、私たち教員・学生も初めての遠隔授業を経験した。タイの学生たちとは、ストリートビューを用いて、今まで行ったことのない場所について共同ワークショップを実験的にやってみた。学期末のアンケートでは、オンライン授業の方が分かりやすいという意見も学生たちからは上がっているが、果たしてそれで良いのだろうか。いわゆる座学や情報伝達の授業については通信教育でも可能であるが、本来使うべき五感のうち視力と聴力しか使わないコミュニケーションでは、今までのようにゲニウス・ロキ※注を肌で感じ、創造的で協働的な世界を組み立てられるとは思えない。私が勤務した丹下先生の事務所（URTEC）では、模型なしの協働設計はあり得なかったし、模型を覗いたり壊したりするデザインプロセスなしに、すべてPC上の3Dイメージをいじくって制作したスケールレスデザインには、楽しさも達成感も感じられない。学生たちには、現地を訪れ、汗を流し、試行錯誤のデザインを楽しむ経験を、これからもさせ続けなくてはいけないだろう。今後は、地域に根ざした「晴耕雨読」のような生活像がリアリティーを持ってイメージされるが、「接地性」を豊かにするための「離地的」努力とのハイブリッドな生活スタイルをどのようにビジョン化するか、専門家には新たな課題が問われている。

TDA 正会員／明治大学理工学部建築学科教授　小林 正美

※注：ローマ神話における土地の守護精霊／土地の雰囲気・土地柄を示す

目次

P1
■巻頭
アフターコロナ時代の生活像と景観デザインについて
／（写真・文）小林 正美
P2～3
■ TDA NEWS-1
TDA 会員に聞く「ポストコロナの景観」　／井上 洋司
■ランドスケープ事情
地方都市・仙台のコロナ禍での歩道空間環境変化とこれからのまちづくりへ　／鈴木 稔
P4～5
■ TDA NEWS-2
連続 WEB セミナー・第１回『雑木の株立ちによる景観づくり』開催報告
／金子 祐介・千葉 晧史
P6
■シリーズ：地域から
小布施町　その３　／西澤 広智
■景観ビジネス最前線　／㈱ノナガセ
■ホワイトボード

TDA NEWS-1

TDA 会員に聞く「ポストコロナの景観」

報告：井上 洋司
TDA 正会員・景観文化編集長
㈱背景計画研究所

パリが今のように美しい街になったきっかけの一つに、感染症の改善策として道路をはじめとするインフラを整備をした事で出来上がった事はあまりにも有名だが、今回のコロナ禍は果たしてどのような景観を形成していくきっかけになるか？　そのヒントを得るために当会員に、200字以内のコメントをいただいた。勿論なかには、まったく変わる事はないと断言する人もいらしたが、多くの人は何らかの変化があるという意見だった。また同時に簡単なアンケートを行った。その簡単な傾向と分析を試みた。

期せずして今号で拙紙は50号であり、会員諸氏の思いを胸に、新たな次の一歩への足がかりを作りたいとの思いも編者にはある。

■質問1　自粛中の活動で主にどのような事普段より多くしましたか？（複数回答可）

1.家の又は部屋の掃除　2.読書　3.ビデオ鑑賞　4.日曜大工　5.ベランダ植栽など園芸作業　6.料理の研究や調理　7.近所への散歩　8.ネットでのチャット、ビデオ会話など　9.SNSへの投稿　10.パソコンを使った遊び、ゲーム等　11.様々な事の整理・整頓（アルバム・映像・コレクション等々）12.その他

この質問で多かったのは「近所への散歩」と「様々な事の整理」でした。会員の多くが都市部に住んでいる事もあり、今まであまり気にしていなかったご近所を歩く事が、新鮮で印象に残ったためでもあろう。考えてみれば、景観問題に深く関わる専門家にとってもご近所の佇まいは正に景観そのものであることに変わりなく、ご近所の景観をより良くしていく活動が会員の力によって生まれるかもしれないという予感がした。

「デザインとは物や事の整理整頓」という我が師伊藤ていじの言葉に従えば、身近な佇まいの整理整頓は、専門家各位の新しい活動範囲になると同時に、それを職業とするために更なる技能的能力や知識が求められる事になると考える。会員のある方は、いつもしている近くの川の草刈りをこの状況でかなりこなしたと。もともと彼はこのボランティアで多くの外来雑草の種類を学び、気候や微気候に関心を持つようになったときます。このように、市民として出来る事も、専門家としての知識を増やす事になるかも知れないと思った。

■浅草寺・雷門の大提灯が4月17日、7年ぶりに新調された。しかしお披露目のイベントは中止となった。

■質問2　これから特に必要になる都市施設あるいは充実すべき都市施設は？（2個まで／その他は含みません）

1.身近な小公園　2.大規模な自然公園　3.図書館　4.博物館　5.スポーツ施設　6.運動競技場　7.農地　8.保全林　9.河川（水辺）　10.大型文化会館　11.大規模な商業施設　12.オフィス街　13.小規模な商業施設　14.小規模オフィス　15.その他

この質問で圧倒的に多かったのが、身近な小公園で、次に保全林、大規模な自然公園、小規模オフィス等であった。ここで分かるのは、出来るだけ人間のまわりに快適な外部の空間が欲しく、且つ自らの社会活動は、小さなオフィスの充実が物語るように、自然で快適な空間を妨げない程度にしていきたいと言う希望を語っているように思う。また上の諸施設には現状は以外と休める設えが少ない事に気がついたという意見もあった。

さて、そう考えている会員が具体的にどのようなイメージで今後の景観を考えているかを次に問うた。

■質問3　コロナ禍を経験して新たに考えた今後の景観等に関する事はありますか？

（匿名にする必要もないが、あえて、メンバーの幅広い意見を発表するにあたり、執筆者名を伏せ原文のままとした）

●銀座街づくり会議から「NEWS LETTER」が届いた。建築士会の機関誌「建築士」には谷根千をはじめ５つのまちづくりが紹介されている。共に識者の関わる景観活動の記録である。その一方で東京駅に隣接した日本ビルの跡地が再開発され390m の高さを持つ巨大ビルが出現するという。強欲な資本主義はどこまで街を壊すのか？　駅と日本銀行の両脇を設計し、スペイン風邪で亡くなった辰野金吾が生きていたら何と言うだろう。

●自宅を中心とする生活になったとき、身近な日常の景観の大切さを実感した。特に緑や河川など自然の存在は、散歩などを通して気持ちをリフレッシュさせる大切な要素である。また、これまでは屋内に限定されていた活動（読書、喫茶、食事、音楽、軽運動、交流活動など）ができる多目的で自然豊かなオープンスペースが身近に整備されると日常の生活が豊かになるだろう。日常の生活圏にシェアオフィスなどが整備されるとライフスタイルも変わるだろう。

●身近な自然、作りすぎない・デザインしすぎない広目の公園の必要性。その景

ランドスケープ事情

地方都市・仙台のコロナ禍での歩道空間環境変化とこれからのまちづくりへ

定禅寺通り “Living Street Project” 全景

“ ユアキッチン Your Kitchen” Project キッチンカー

これまで自由に国内外の街を訪ね、新しい出会いに感動を得てきた。しかし新型コロナ感染により、全国でマスク装着・行動自粛・テレワークが常態化し世界的パンデミックの出口がまだまだ見えない。経済活動と感染症対策を前提とした『新しい日常生活』が始まり、働き方の変化（在宅リモート・サテライトオフィス等）で地方分散が進むとの声もある状況で地方都市・仙台に住む身で見えている歩道空間利用の変化やこれから期待されるまちづくり展望を報告する。

◆仙台中心市街地の歩道空間利用変化

杜の都を代表する青葉通り・定禅寺通りはそれぞれの街づくり協議会が公民連携で景観地区計画と街づくりビジョンを掲げ、歩道空間利活用の社会実験を20年以上にわたり継続実施してきた。今年はほぼ全イベント中止で寂しい限りだ。七夕や青葉祭りの伝統行事の他に、青葉通りピクニック（歩道＋沿道ビル屋上利用）や天然芝とイス＋産直市、定禅寺通りでの光のページェント・Street Jazzフェスティバルやオープンカフェ・パークレットなどがそれだ。6月に国土交通省がコロナ禍での感染対策と地域活性化を目的とした道路占有許可の緊急措置（テイクアウトやテラス営業等の道路占用の許可基準緩和）で実施した定禅寺通り“Living Street Project第4弾”を報告する。せんだいメディアテーク真向いの歩道に沿道店舗ほか13主体が自由に飲食するテーブルセットを設置した（R2/6/15～7/15実施　10:00～19:30）。昨年秋も同様に社会実験をしているが、今回は感染防止でイス数を減らし天候不順とも重なり静かな利用状況に見えた。その後追加で7/30～8/20の開催が決まり、夏の天候での木陰の心地よさで賑わいが期待できそうである。また隣接する夜賑う路地（稲荷小路＆虎屋横丁）では”イナトラほろ酔い縁日“（R2/7/31～8/8実

観は作りすぎないこと、デザインしすぎないこと。

●今回の河川の氾濫等も考え合わせると、令和の大飢饉とも呼ばれそうな時代ですが、基本的には経済を優先し過ぎて、都市に人口が集中し過ぎたことが問題ではないかと思います。もう少し、それぞれの地域の自然地形を生かし、そこで暮らせる人口を調整する必要がありそうに思う。

●外出自粛とテレワーク勤務が始まり自宅でパソコンに向かい合う時間が増加してきた。これまで歩き回っていた都市空間がいかに行動の一部になっていたか人生で初めて気が付いている。今後の都市デザインにおいてこれまで必ずしも必要でないところに議論が集中してきたのではないかとおもわれる。また、景観材料も規格に縛られ効率性、経済性が優先されてきたが、これからは精神性、気持ちよさが重要となってくるのかな。

●意外に都心のオフィス街のほうが休める公共空間が増えているに対し、郊外では雨や日差しを避けてゆっくり過ごせる外部空間が全くないことがわかりました。「まちを使いこなす」という視点で身近な施設の設計や公園、用具の配備などを見直す必要を感じました。

■神田駅西口商店街の夏の昼下がりの風景。以前のようなランチタイムに賑わう人々の姿はない。

●時差通勤やテレワークで時間の使い方に個人差がうまれ、それ等の人々が日常的に気持ちよく過ごすことが出来る公共空間の充実が求められる。一方交通機関にこれまでよりも少々ゆったりとなり、テレワークの進展にともない地方定住や移住で地域それぞれの良さが見直され、活発化-風土性豊かな景観形成が行われる。

●ランドスケープアーキテクト、アーキテクト、建設会社、電気および電話会社、政府関係者はすべて逮捕され、これ以上の破壊行為を禁止されるべきです。車や道路は地上から排除する必要があります。 緊急車両と配送車両、電気車両のみが走行を許可されます。 住宅建設業者は、購入した土地の30%を、家あたり最低3メートルの高さの最低3本の木がある緑地として維持する必要があります。

●自由になる公共空間の確保と日常的な感染病対策のシュミュレーション（コミュニティの中でのイヴェントとして）。また緊急時に使える公共空間が日常景観の風景となる様な景観づくりが必要。

●緊急事態宣言時はどこにも行けずに、だからといって家で気持ちよくデスクワークや趣味が進むわけでもない。いらいら感が高まってしまう日々であった。身近な距離に気持ちが晴れるような癒される場が有ればと。眺めの良い高台の公園・木陰が気持ち良い大樹で佇めるベンチ！改めて生活周辺の小公園や散歩道・サイクリングロードなどの質を高めた整備がこれから重要だと思う。

●東京一極集中からコンパクトシティ化やテレワーク環境の整った集合住宅が必要となってくると考えます。また、公園などにおいてもテレワークが可能な設備を検討することでリラックスしながら効率を上げるワークスタイルが望まれると思います。外にも、ソーシャルディスタンスを確保しながら、ウイルス対策を踏まえたストリートファニチャーやミストの施設を利用した定期的な除菌システムなども考えられます。智恵を絞り、新たな転換を目指す必要性を感じております。

●コロナ禍でも行われたメディアによる観光キャンペーンの結果、東京近郊にある自然豊かな場所は、東京からの旅行客で賑わいました。ただ、一方で外国人観光客が押し寄せた時とは少し違う状況ではあるもののオーバーツーリズムパニックに陥っていました。こうした状況を見ていると、医療体制の完備された観光拠点づくりと広域な自然景観を景観の視点から整備をしていくことが当面の地方都市の課題ではないかと考えさせられました。

●日ごろから身近なところの景観をより良くしていくこと、近場の屋外に心地よい居場所をつくっておくことは日常にとっても大事であるし、感染症によるロックダウンのようなことが起こる場合にも重要であることを実感しました。家や屋内に籠るだけでは暮らしが窮屈になり、憩いや仕事といった観点からも屋外での過ごし方が豊かに、また景観の心地よさにつながるような取り組みを今後さらに進めて行く必要があると思います。

●大規模に都市の構造を変えることは出来ないが、都市の使い方が変わってくるのではないか。リモートワークの普及によって、職場で行っていた業務が時間と場所に縛られることなく自由に業務ができることで、通勤圏内で居住しなくてもよくなり、住む場所の選び方も変わるのではないか。通勤時間がなくなることで、居住周辺で過ごす時間や身近にある公共空間の利活用の機会が増え、それらに関する意識も変わってくるのではないか。

●従来型都市中心部の新たな価値の創造：コロナ禍を通じてオンライン化等を生かした都市近郊などへの新拠点の形成などが期待されている。一方、従来の都市中心部の業務商業地区では機能の一部移転などが起こることも予想出来る。そういった中で、従来型都市中心部の今後の価値を見つける作業と、都市での新たな活動を活発化させる空間提案などを行いたい。

TDA 正会員／あおば景観デザインネットワーク　鈴木 稔

“ユアキッチン Your Kitchen” Project 北側広場テント店

ドイツ Dusserdorf のオープンカフェ

施　19:00～21:45）でテーブル30台規模の新しい社会実験が実施された。

◆仙台駅東口の歩道空間利用変化

再開発著しい仙台駅東エリア（宮城野通り＋ユアテック北側広場）で実施している“ユアキッチンYour Kitchen”Projectは、仙台駅東まちづくり協議会がエリアまちづくりビジョンを掲げ歩道空間を利用して住みやすく楽しい街づくりを目的に、フード・お弁当を5台のキッチンカーと3テント売店で販売している（R2/6/16～9/14実施　11:00～18:00）。ただしテイクアウト主体で感染防止のためにテーブルセットの設置は行われていない。仙台駅東口に近くオフィスビルが多く人通りは非常に多い場所で、利用者も日常の生活として活用されている様子。やはり購入したフード類を食べる場が設けられていないのは、非常に残念な気がする。

◆コロナ禍でこれからの歩道空間利用とまちづくりにどう活かせるのか

仙台市では『せんだい都心再構築プロジェクト』～働く場所・楽しむ場所として選ばれる杜の都の個性きらめく躍動のまち（都心）～をR1.7月に発表して公民連携で取り組んでいる。具体的な構想は①公共空間と民有地が一体となり生み出されるゆとり空間に新たな賑わいや魅力を創出する、②公園や街路樹の整備により緑の質を高め憩いと安らぎを生む都市空間の利活用を推進する、③裏路地のリノベーションで街の魅力を多彩にする等。これらの目標実現にコロナ禍での社会の動きは確実に追い風となっていると思われる。方向性も合致しており最終的な社会実験を終えて、北国の風・寒さに配慮された常設型で杜の都の歩道空間を彩るオープンカフェなどの利活用が随所に見られ安心して人が集い交流して楽しめる街の姿がもうすぐ目の前と期待される。

NEWS-2

連続 WEB セミナー・第１回『雑木の株立ちによる景観づくり』開催報告

景観デザイン支援機構・連続 WEB セミナーの第 1 回を 2020 年 8 月 20 日に開催いたしました。

今後、当分の間は続くであろう「with コロナ、ポスト･コロナの状況下において、どのような景観を創生していくべきか？」ということで、我が TDA でも企画などの検討を積み重ねております。

そこで、コロナ禍に先行して各地域で活動されて来た景観支援の取り組みの中から､あらためて昨今の with コロナ､ポスト･コロナの状況下にあるべき景観支援を主導されている方をゲストとしてお呼びし、オンラインを活用した全国規模での勉強会として、本 WEB セミナーを実施する運びとなりました。

※講演の全容は、まちづくり上井草Facebook冒頭でご覧いただけます。
https://www.facebook.com/machidukurikamiigusa

コロナ禍においてまちづくりの未来を考えるWEBセミナー

金子 祐介　TDA正会員・景観文化編集委員
城西国際大学助教

第１回目は、デザイナーで俳人の千葉晧史氏をゲストとしてお呼びし、「雑木の株立による景観づくり～みどりの住宅地に街文化の小拠点を～」と題した講演を行なっていただきました。発表内容は、第一部「かみいぐさ雑木みちプロジェクト」について 」、第二部「地域の歴史風土と、多自然まちづくり」という二部構成です。

第一部の発表では、千葉氏が本業であるデザイン文具のプライベート・ブランド運営のかたわら、アトリエ兼カフェを置く東京都杉並区上井草で長年取り組んでこられた雑木の〈株立〉による緑化プロジェクトを中心にご紹介いただきました。

■上井草の＜株立＞によるグリーンベルトの起点：genro入口付近の様子

この<株立ち>による緑化プロジェクトは、千葉氏の言葉を借りれば「大きな変化ではなく小さな変化」「点から線へ」の「修景」を繰り返しながら「50年後のこの地域に、固有の魅力的な街文化が生まれることを目指す」運動だと言えます。その想いもあって、上井草への賛同者、出店者も増え始めており、三菱地所レジデンスや、スターツ・コーポレーションなどの大手企業なども参加しての、グリーン・ベルト創生事業となっています。

■カレーキャラバンが行われている様子

第二部の発表では、そうした〈株立〉による緑化取り組み「かみいぐさ雑木みちプロジェクト」の背景となる、地域の地形・風土や近郊農村文化が紹介されました。商店街との連携では、上井草商店街振興組合公式webサイトkami-igusa.comの立ち上げと更新作業、グリーン・プランターや植木鉢の設置と水やり、駅植栽や駐輪場フェンス緑化の維持管理、商店街発行フリーマガジンの企画編集、地域マップの制作、地元

■パークハウス杉並・上井草の植栽

■野村不動産・プラウド杉並上井草の植栽

アニメ産業との連携など、多方面に渡る活動があります。武蔵野台地上に位置する上井草には、標高50mの等高線（50m崖線）が関わっていますが、この「５０m崖線」沿いに分布する石神井・大泉・上井草のネットワーク誌『井』の一員でもあります。新たな街文化創造には、無名性を担保するだけの広域性が必要と考えられるからです。

■フリーマガジン『井』

以上からもわかるように、千葉氏の講話は一貫して、トップダウン型ではなくボトムアップ型の景観形成を行うためのシビックプライドを醸成していく活動であり、講話後も多くの参加者と上井草の将来の景観形成やポスト・コロナにおける景観のあり方についての実りある意見交換会がなされました。

TDAとしましても、今後もこうした会を行なっていければと思いました。

■かみいぐさ雑木みちproject パンフレット

上井草のまちづくりを通じて考えたあるべき街の姿

千葉 晧史　俳人／篆刻家／デザイナー
「まちづくり上井草」代表

講演後の質問コーナーでは、「ポスト・コロナのまちづくりのあり方」に関するお尋ねがありました。ただ、その場では、十分な回答が出来ませんでしたので、その後に考えたことを記したいと思います。

北海道旭川空港から車で30分ほどのところにある「東川」（旭川市ではありませんが）のことは、皆様もご存知に違いありません。

私は『東川スタイル』という本でこのまちに興味を持ち、１昨年の８月に訪問、２泊しました。

「鉄道、国道、上水道の３つの道がない」といわれる東川。美しい景観を活かして、写真愛好家の高校生たちを毎夏呼び集めて行う「写真甲子園」が有名です。実は、このまちは、過疎、過密のいずれでもない「適疎（てきそ）」という理念を掲げています。

賑わいに欠ける我が上井草ですが、過疎、過密のいずれでもないことは東川と同じかも知れません。そこで、東川の目指す「適疎（てきそ）」の実態を自分の目で見たいと考えました。

しかしながら、まちづくり上井草FBの関連記事画像（https://www.facebook.com/machidukurikamiigusa/posts/681661438859550）を一瞥すればご理解いただけるように、東川の「適疎（てきそ）」とはあくまでも北海道基準なのでした。東京23区に当てはめれば、東川のまちなみの実態は「過疎・かそ」そのものに他なりません。

私たち夫婦は最初、このまちを自分の足でくまなく歩いてみたいと思っていたのですが、空港で話を聞くと「歩いて回るのはとても無理」とのことで、レンタカーを借りることにしました。

まちの中心地にある案内所「道草館」でもらったマップを頼りに、自家焙煎のカフェや、「北の住まい設計社」のレストランや、玄米おむすび「ちゃみせ」などのピン・ポイントをレンタカーで訪ねて回りました。若い世代によるスモールビジネスが盛んなのは、１つには景観が優れているからでしょう。新世代が、この土地の暮らしに憧れるのは当然です。経営も順調（夏場だけのビジネスですが）にみえました。個性的な各店の魅力もさることながら、道中の田園の美しかったこと！私たち夫婦は、すっかり東川のファンになって帰京しました。

「ポスト・コロナ」「ウィズ・コロナ」を考えるなかで、東川の掲げるこの「適疎（てきそ）」の理念は、あらためて１つのヒントになるのではないでしょうか？

従来のまちづくりの中心課題は「賑わいをどう生むか」であり、イベントの動員数がその評価基準になってきました。
しかし当面は、「三密」を避けなければなりません。上井草にふさわしい「適疎（てきそ）」を探る必要があるといえそうです。

東川では「適疎（てきそ）」の旗印を掲げて転入者を募りながら、同時に「関係人口」を増やそうとしています。夏ごとに継続的に大勢の高校生が東川を訪れる「写真甲子園」は、東川ファンを増やすことが最大の目的です。わが上井草は住宅地＝ベッドタウンですが、スポーツセンター、早稲田ラグビーグランド、ちひろ美術館、アニメミュージアムなどがあり、周辺には善福寺公園、石神井公園、井草八幡宮、観泉寺、井草遊歩道などがあります。上井草の中心市街地は、それらの魅力スポットを統べるハブ拠点にならなければなりません。「かみいぐさ雑木みちプロジェクト」の目的は、それらを繋ぐルートの景観をみどり豊かなものにすることでこの街の「関係人口」を増やすこと、つまり内外に上井草ファンをふやすこと、といえそうです。

プレゼンでも強調したつもりですが、株立ちによる植栽は近隣とのあいだに「見え隠れ」の関係を作り出します。付かず離れずの、ほどよい距離感を醸成します。「三密」を避けなければならないポスト・コロナ生活の舞台づくり・環境づくりに、株立ちの植栽は最適といえるのではないでしょうか？

わが上井草の「適疎（てきそ）」を探る中で思い浮かんだのは、在りし日の「阿佐ヶ谷住宅」です。なかでも前川國男設計のテラスハウス！またお隣の練馬区では、築50年を迎えた「石神井公園団地」が、建て替えのため今まさに取り壊されようとしています。のびのびと本来の樹形を成就している庭の木々はどうなるのでしょう。

■まち歩き活動に利用した雑木みちMAP

■『東川スタイル』の視察状況

■上井草のファンを増やすことに繋がっているまち歩き

地域からの活動報告 **シリーズ：地域から**

㈱宮本忠長建築設計事務所　西澤 広智

「小布施町」その３

まちづくりはエンドレス

風の広場

ゲストハウス小布施

前回、「のぼりの広場」の誕生についてお話ししましたが、修景計画では、土地の等価交換や借地等の条件交渉を市村次夫氏中心になってまとめ、住宅建設の費用に見合う費用を地代として企業が負担するというように、「どこの誰も犠牲にならない」が大原則で計画を進めました。短冊形の敷地に連なっていた土蔵や納屋を曳家や保存することで、車社会に必要となった駐車場を確保すると同時に、広場として「ミンナ」が使える公益性のある空間が生み出されました。建物と建物の「間」の空間の性格が変化し、広場や道空間のあり方を重視しゆとりを生み出し、その「場」に公益性を付加し、エリア全体が散策したくなるような潤いのある空間となりました。

「小布施町並修景計画」が一応の完成を見た1987年頃から、「修景」のまちづくりが建築関係者を中心に、全国的に注目され、周辺住民の環境整備の機運が高まります。

1989年に「住まいづくり相談所」を、役場庁舎内に開設し、1990年に「うるおいのある美しいまちづくり条例」が制定されます。

「住まいづくり相談」は、宮本忠長とスタッフが相談員となり、住宅を考えている方々の相談にのり、「小布施町並修景計画」を進める中で醸成された環境整備の考え方を伝え、改善点の提案を一軒一軒お話しするものでした。

「小布施町並修景計画」は、官・民同格で、小布施町（官）はあくまでも一地権者として参画したもので、官が指導的立場で強制的に行ったものではありません。また「うるおいのある美しいまちづくり条例」も「協力基準」で、強制的なものではなく、みんなで知恵を出し合って、潤いのある良い環境の町に「ミンナ」でしていきましょうというものでした。

その後、我々の事務所で「小布施町並修景計画」の周辺だけでも「傘風舎」（小布施堂栗菓子工場）：「北斎館」の増築・「SAN POO LOH」（小布施堂のレストラン）・「小布施ガイドセンター」・「樋田邸・ゲストハウス小布施」と、1996年頃まで立て続けにプロジェクトが続きます。

長野オリンピックの前に、高速道路用地確保のために、小布施町の山王島という地区の集団移転が行われた際には、住宅相談が機能し、我々の事務所が直接設計するのではないけれども、良好な町並み・生活環境の集落を形成しました。

宮本忠長は、一設計者であると同時に、小布施町の「タウンアーキテクト」の役割が増していったように思います。

景観ビジネス最前線

木目調タイル

朽ちることのない、美しいままの木目

株式会社ノナガセ

お問い合わせ：建築営業所　担当　小野田：ry-onoda@nonagse.co.jp
阪　田：s-sakata@nonagase.co.jp
〒104-0032　東京都中央区八丁堀４丁目８−２　いちご桜橋ビル　TEL. 03-3552-1313

ホワイトボード

世の中、コロナ一色。一方で7月の長雨8月の猛暑そしておそらく9月の台風と、自然の前に人は立ち往生。長く経済を第一と考えてきた事に自然が怒りの牙を剥けたようにも思える。このような時代は都市や街に必ず何らかの痕跡を残していく。景観をより良くしようとする専門家のスキルも進化しなければならないし、記事のセミナーの報告にもあるように、優れた市民活動を支援する活動も求められるであろう。いずれにしてもこのコロナ禍が、人にとって、より豊かな景観形成の布石になる事を祈ってやまない。

TDA JAPAN

NPO法人 景観デザイン支援機構　事務局
〒111-0043 東京都台東区駒形 1-5-6　金井ビル 3F
Tel：080-6722-4114　Fax：03-3847-3375　E-mail：main@tda-j.or.jp
http://www.tda-j.or.jp　https://www.facebook.com/tda.public
編集長：井上 洋司　名誉編集長：曽根 幸一　編集委員：矢内 匠／金子 祐介／倉澤 聡／中野 竜

私達は下記の企業・団体のご協力をいただいています。
㈱昌平不動産総合研究所／日軽エンジニアリング㈱
都市環境デザイン会議／㈱都市環境研究所

ＤＴＰ：㈱アーバンプランニングネットワーク　2020091000